はじめに

おやさと研究所研究員
尾上　貴行　*Takayuki Onoue*

異文化適応と天理教の北米伝道

他国を訪れ、社会的文化的な違いに戸惑い困惑したという話はしばしば耳にする。仕事、旅行、留学などで海外に出かけ、様々な異文化体験をしたことがある人も少なくない。また外国に長期滞在や定住している人々も同様の体験をしているだろう。ただし長期滞在者や定住者にとっては体験するだけではなく、その異なる社会や文化にいかに対応していくかが大きな課題となる。新しい居住地において快適な生活を送るためにはどのようにどの程度その環境に適応しなければならないかを考えることが必要となってくる。滞在の目的にもよるが、様々な面で必然的あるいは自発的に適応していく中で、結果として渡航前のパーソナリティやアイデンティティが大きく変化することも起こりうる。

近代日本の移民活動は、明治政府がハワイ王国政府との条約により1885年に移民を送り出した頃から日露戦争に至るまでの20年の間に本格的に成立したとされ、以後ハワイやアメリカ本土、カナダ、中南米、東南アジア、オーストラリアなど様々な国と地域へ日本人が渡っている。初期の移民は農業や鉄道敷設などの仕事に出稼ぎ労働者として渡航した人々が多い。戦後日本に駐留した連合軍の軍人と結婚し、アメリカ、オーストラリア、カナダなどへ渡った日本人女性もいる。彼女たちの新しい社会での生活は過酷を極めたとされるが、各地域社会へ定住していく過程で、そのアイデンティティも多様な変化をしたことが観察されている。「日本人の義理人情や遠慮は、こちらの生活には何の役に立たないと痛感した。日本に帰国したとき、アメリカ帰りはハッキリものを言うので怖いと恐れられた事がある。」、「自分が何者かといつも考えさせられている。」など、新しい社会に適応する中で大きな変化が生じた経験が語られている。またアメリカに生まれ育った日系二世や三世が自己のアイデンティティをどのように認識しているかについてもこれまで様々な研究がなされている。

移住した人々のアメリカ社会への適応を考察する枠組みとしては、アシミレーション（同化）理論がよく知られている。これはホスト国であるアメリカ社会の特質であると考えられた白人アングロサクソン・プロテスタント社会への同化を最終段階として、その過程において段階的な変容を経ると説明したものである。また同化への過程と考えられるアカルチュレーション（文化変容）、あるいは民族運動の高まりとともに提唱されるようになったカルチュラル・プルーラリズム（文化多元主義）やインテグレーション（統合）という概念も異文化への適応の枠組みとして考えられてきた。この他にも「モザイク国家」、「メルティングポット」、「マルチカルチュアリズム」などといった言葉を耳にされた方も多いであろう。

また近年になってから、移民のホスト社会への適応を考察する理論として「トランスナショナリズム」が注目されるようになっている。これは複数国を越えて移動する人々の現象を政治、経済、歴史、社会、文化など多角的な視点で検討する枠組みで、「社会形態論」、「意識類型論」、「文化再生産論」、「資本流通論」、「政治参加論」、「地域性再構築論」などに分類した研究もおこなわれている。また本誌のタイトルにも使用されている「グローカリズム」（グローバリズムとローカリズムを橋渡しした概念）や「トランスローカル」（国を越えた地域社会の繋がりという概念）などの考え方も提示されてきている。

天理教は「世界たすけ」を標榜し伝道宗教としてその教えを日本国内のみならず海外の国々へ伝えることを使命としており、19世紀末から現在に至るまで世界各地において伝道活動を展開しているが、それは異なる文化を体験し、異なる社会への適応の歴史でもあったとも言えるだろう。

天理教の海外伝道は、一布教師が明治26（1893）年に韓国へ渡ったのが嚆矢とされ、以後朝鮮半島、台湾、中国、満州へと次々と布教師が入って行ったのであり、また明治43年（1910）にはロンドンへも布教師が渡っている。さらに、教祖40年祭の前後から海外伝道に力を入れる方針が打ち出されていった。大正14（1925）年に海外伝道を推進する目的で天理外国語学校（現天理大学）が設立される。また昭和2（1927）年に論達第3号が発布され、海外伝道意欲の昂揚と組織的、本格的伝道の開始が宣言されると、教団組織内に海外伝道部の新設、海外伝道規定の制定などが行われ、海外布教への体制づくりが進められていった。こうして天理教の海外伝道への気運は大いに高められることになったのである。

天理教の北米での布教活動は19世紀末に始まり、1929年にアメリカ本土にサンフランシスコ教会が設立されて以来次々と教会が設立された。戦時の抑留により壊滅的なダメージを被ったが、戦後徐々に復興を遂げ、2015年発行の『第84回天理教統計年鑑』によれば現在アメリカ本土には教会58カ所、布教所56カ所、ハワイには教会34カ所、布教所40カ所、カナダには教会4カ所、布教所9カ所があり、各地域で様々な布教活動を展開している。

当初北米へ渡航した日本人のほとんどはハワイ王国への出稼ぎ労働者であり、1886年から1900年の間には52,853人がハワイへ渡っている。しかし1898年にハワイがアメリカに併合されて以降、アメリカ本土への渡航者が増え、在住する日本人移民の数も1900年に24,326人、1910年に72,157人、そして1920年には110,010人となった。北米における初期の伝道はこうして移民として渡航した天理教信者によって開始され、主な布教対象は組織的な伝道が開始された後も渡航した日本人移民であった。また現在のようぼくや信者も多くが各地に在住する日本人や日系人であることから考えると、北米における天理教の布教伝道はそこに在住する日本人や日系人との関係を抜きには語れないことは明らかである。

そこで本連載では、天理教の北米伝道の歴史をより良く理解することを目指して、アメリカ本土、ハワイ、カナダへ渡った日本人またその子孫である日系人の適応の歴史的観点から、北米での天理教の展開について考察する。そのために、日系移民社会と天理教の両方の歴史を概観しながら、大まかに戦前、戦中、戦後という区分に分けて、日系移民の世代ごとの異文化適応や天理教信者の信仰の継承などそれぞれの特徴的な様相を検証していく。さらに移住者がホスト国へ適応していく中で大きな要素の一つとなる宗教について、北米に渡った日系宗教の展開と日系社会で果たした役割なども考察しながら、今後の北米伝道における課題と展望を明示する一助となることを目指したい。